それは イルゼ・アイヒンガーからはじまった

1921-2021

語りは終末から終末へ

Es begann mit
Ilse Aichinger
1921–2021

会期：2023年10月28日（土）～11月14日（火）

会場：日本大学図書館法学部分館 1F ロビー

キュリエーション：クリスティーネ・イヴァノビッチ ／ 真道 杉

それはイルゼ・アイヒンガーから始まった
1921–2021
終末から終末に向かって語る

イルゼ・アイヒンガー生誕100周年企画展

２０世紀から２１世紀にかけてドイツ文学に大きな影響を与えたオーストリア人作家、イルゼ・アイヒンガー。２０１６年、９５歳の誕生日を祝うムードの中で生涯を終え、その余韻が残る２０２１年に生誕１００周年を迎えました。生誕１００周年を記念して、オーストリア外務省が企画制作をしたデジタル・パネル展示が本展覧会です。

本展はすでに、スペイン、ベルギー、フランス、ルーマニア、イタリア、ギリシア、中国、ブラジル、等で展示されており、文学ファンだけなく、一般の方や学校関係者にも好評を博しております。コロナ禍で日本での開催が見送られておりましたが、この度ようやく公開できることとなりました。日本での本展示は２０２２年 EU 文学フェスティバルで紹介された後、奈良県立図書館、都立大学、福岡 ajiro 書店、学習院大学にて展示され、この度日本大学図書館法学部分館にて公開されることとなりました。

タイトルが示すのは、戦後のドイツ語圏文学の始まりです。ナチスの凄惨な戦争犯罪とプロパガンダによる言葉の濫用は、ドイツ語圏文学にとって致命的な足枷となりました。アウシュビッツの経験の後、どのような言葉を紡げば良いのか混迷していた世の中へ、イルゼ・アイヒンガーは最初の小説『より大きな希望』（１９４８）を送り出しました。本展示のタイトルの「それ」とは戦後ドイツ文学の夜明けを指します。暗い時代にアイヒンガーの言葉は文字通り希望の光として、ドイツ文学に新しい時代を照らし始めたのです。それ以降、アイヒンガーは常に時代を鋭く冷静に見つめ続け、その先の世をあるいは私たちが生きる世の時代を超えて切り拓く言葉を紡ぎ続けました。その言葉は時には難解と受け取られ、理解されないこともあり、彼女は生涯決してポピュラーな作家にはなりませんでした。しかし、彼女の言葉は時代を超えて私たちに読んで一緒に考えることを促してきます。

本展では、イルゼ・アイヒンガーの言葉と写真をはじめとする資料を通じて紹介しております。戦争を生き抜いて卓越した言葉を紡いで生きたイルゼ・アイヒンガーの生涯と彼女が生きた時代を追体験することができます。

１９２１年にウィーンで生まれたイルゼ・アイヒンガーには、一卵性双生児の妹がいました。妹のヘルガは戦争が始まる前にロンドンへ亡命をして、姉妹はそこから全く別の人生を歩んでゆくことになります。自分の分身である妹のために、自分の体験を分かつためにイルゼは文筆活動を始めます。そして、それに呼応するようにヘルガは絵を描き始めます。二人の響き合う魂の共鳴は作品にも表れています。本展では、各パネルにヘルガの絵を添えてあります。二人の作品の共鳴も合わせて鑑賞していただければ幸いです。

オーストリア外務省制作
キュリエーション：クリスティーネ・イヴァノビッチ / 真道　杉
日本語訳：真道　杉